十勝毎日新聞
発行所
十勝毎日新聞社
〒080 帯広市東1条南8丁目
電話＝編集㊀2121、広告㊀2323、総務・販売㊀2222
©十勝毎日新聞社 1992

宇宙開発最前線

☆☆3☆☆

富士重工

HOPE開発にしのぎ

7年に実験機飛行

栃木県宇都宮市。人口約四十二万人のこの都市に七百㍍滑走路を持つ自衛隊航空基地と並んで、富士重工の航空宇宙事業部門、宇都宮製作所がある。

同社六部門、約一万五千三百人の従業員のうち、航空宇宙事業部約三千人（二〇％）がここで働く。工場内に入ると、目につく所に「全員参加でSUBARUを売ろう」の横断幕が掲げられ、全社一丸となった意気込みが伝わる。

宇宙、航空の時代

菊川電繁宇宙技術委員長の案内で、視察団は本工場で金属部品の製作をするNC ショップ、複合材部品の製作ショップ、統一の部分が立ち並び、技術者が厳しいチェックをしながら、確実な作業を繰り返している。

「当社はこれまで蓄えてきた航空機技術をベースに、地球と宇宙基地を結ぶ宇宙往還機HOPEの研究やスペースプレーンの研究を指し、開発にしのぎを削っている。富士重工の場合、富士の三重工が主契約者で、HOPEは三菱、川崎、大きな翼、尾翼、ボディ・開発にも積極的に取り組んでいる。自動車産業は成熟しているので、これからは宇宙、航空です。」会社案内ビデオの説明で、HOPEロケットに搭載して宇宙ステーションと地球を往来し、物資を運ぶHOPEに話が及び、一行の質問はこぞって集中した。

10㌧級HOPE設計

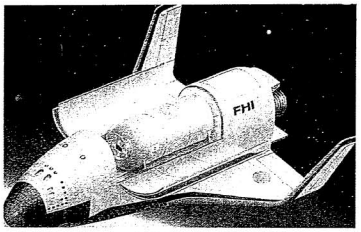
HOPEは三菱、川崎、富士の三重工が主契約者で、昨年度二十㌧級、今年度はHOPEロケットに合わせて一十㌧級のHOPEの設計を進めている。長さ十二、三㍍、高さ三、四㍍大。実現するのはもとかく、国の予算次第と説明した。

最近、これの小型実験機を栃木県・壬生町の自動車テストコースで、ヘリコプターを使い、三百㍍上空から落下、滑空させ着陸に成功している。

菊川電長は「本格的に実験するとH-Ⅱ四方に民家がなく、長さ五㌔、幅六十㍍級の滑走路が必要。しかし、今はその場所はない。予算が認められると、七年に実験機が飛び、二〇〇〇年二十年（二〇〇八年）には、HOPEが実際に大樹で飛ぶように、宇宙センターの誘致につながるのかな、と思った」と目を輝かせていた。

（つづく）

（小野寺　裕記者）



宇宙開発事業団に提案しているHOPE

<メモ>

富士重工業株式会社　大正六年、中島知久平氏が創設した飛行機研究所としてスタート。中島飛行機となり、戦闘機の傑作「隼」「疾風」などを生産した。昭和二十八年、富士重工業として再出発。間航空機の国際共同化の分担でボーイング、マクダネルダグラスの機体構造生産に参画している。

大樹に滑走路を

視察団に参加した大樹町商工水産課の舟越浩三係長は「HOPEの開発がここまで進んでいるとは。町では多目的滑走路の計画があるが、こうした努力を積み重ねることで、HOPEが実際に大樹で飛ぶようになり、宇宙センターの誘致につながるのかな、と思った」と目を輝かせていた。

トラック・バスレンタカー
高木レンタカー
帯広市西2条北1　☎22-0207